

白金蔭

三月号



平成24年3月発行 第13号

白金葭月例句会案内

月例句会報、12／3／16、蜥蜴出づ、牡丹の芽(7名入り)

四月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスター第一和室)

兼題: 仏生会(花御堂、甘菴)、豆の花

五月十八日(金) 12:00 ~ 18:00 (アビスター第2和室 ~ 第3学習室) 兼題: 祭 薮野火の菅野主宰出席の拡大句会

六月八日(金) 12:00 ~ 15:00 (第3学習室)

兼題: 茄、玉葱

兼題の参考句 (四月月二十日分)

仏母たりとも女人は悲し灌仏会

橋本多佳子
龟田蒼石

仏生会切藁上になる途中

川崎展宏

百代の遺伝子を継ぎ花祭

和田浩一
仲寒蝉

鳥たちに空闊けてゆく仏生会

前田千恵子

黒鞆下げて布教者花まつり

河野輝暉

ふる里ほ咲する油断豆の花

信濃小雪

天まで昇れぬ齡豆の花

宇多喜代子

高熱ばむらさきがちの豆の花

岩井久美惠

神々の島かと思ふ豆の花

辻本俊子

母折り折りおとぎの国へ豆の花

光成敏子

蜥蜴出づまたルリ色の光曳く
余震過ぎまだ揺れ止まず雪柳

増田悦子

飯田孝三

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

牡丹の芽三寸伸びて日の高し

蜥蜴出づより振りむく尻尾瑠璃

ほのぼのと舌蛤となり雀

うかうかと亀寿獺の魚祭

増田陽一

風強き沼の白波鮒の声

病院を出る天皇や春時雨

白鳥の踏み跡残し本楚村

蜥蜴出づレコードの針置き直す

沈丁花香のうしろにて明滅す

蜥蜴出づまたルリ色の光曳く

余震過ぎまだ揺れ止まず雪柳

蜥蜴出づ挨拶の如ふり向けり

牡丹の芽金魚のやうなリコプター

牡丹の芽壙のうしろにキリンゐる

光成高志

蜥蜴出づ寅さん堤西斜面

高压電線鉄塔竹の秋

牡丹の芽光陰止まる時もあり

牡丹の芽ほぐるる前の芽の林

大輪を具すとも見えで牡丹の芽

光みち

わが庭の四五歩で足りる牡丹の芽

漢字表に芯の加はる牡丹の芽

擁壁の穴の数だけ蜥蜴出づ

春風や移動図書館来る広場

茎立や逆さに巻の干されぬて

杉浦弥栄子

牡丹の芽蕾を包み直立し

復興の兆しみちのくに少し牡丹の芽

町の角足停め見あぐ河津桜

地震の禍の荒れた大地に蜥蜴出づ

田宮敦子

舊乃木邸棗芽吹きて鳩飛へり

三樋や若い女性に行く子犬

庭園の芝の種蒔き一人組

客の居ぬ野外ガーデン雀の子

行灯の美しき絵桜海老

青木啓泰

蜥蜴出づ赤提灯の裏口に

蜥蜴出づ背戸から畠に壺移し

牡丹の芽うすむらさきに童女寝る

かんぴようが頭の中で煮えている

春炬燵メモから一句に格上げす

みちのくのすべてを覆う春の雪

倉田紀子

軍鶏飛んで蹴つて掴めり春の泥

おとこし

くる

男衆の酒を食ふて凧日和

おとこし

眼帶を外れし朝草青む

たわひなき夫との諍ひポピー買ふ

鬪鶏は明日とこうへ鶏眠る

しろみそら

はるけくも呉天の青さ牡丹の芽
事無しの海の静かやビキニデー
河馬あくびして春愁の始まれり

蜥蜴出づかかと着地の園児過ぐ

百日なるややのほづべ牡丹の芽

ももか

志の高くなり行くふきのたう

百坪の端に芋植う母牟寿

菜の花に下総淨土ありにけり

吉羽多美子

麦青む真只中に一軒家

啓蟬や猫の水のむ水たまり

古寺の山門ぐぐる牡丹の芽

選句結果（数字は入選数）

4 眼帶の外れし朝草青む

3 軍鶏飛んで蹴つて掴めり春の泥

3 鶯や滅法暗き女坂

3 河馬あくびして春愁の始まれり

3 蜥蜴出づ背戸から畑に壺移し

3 牡丹の芽金魚のやうなベリコプター
3 茎立や逆さに傘の干されぬで

地虫出づ若者は皆村離れ

嘉悦羊三

春の雲麒麟の虚空ありにけり
フルートの吹鳴縷々と蜥蜴出づ

紀子
羊三
多美子
みち
悦子
啓泰

啓蟄や猫の水のむ水たまり
蜥蜴出づレコードの針置き直す
舊乃木邸棗芽吹きて鳩飛べり
百坪の端に芋植う母生寿
百日なるややこのほつべ牡丹の芽
漢字表に芯の加はる牡丹の芽
病院を出る天皇や春時雨
わが庭の四五歩で足りる牡丹の芽
麦青む貞只中に一軒家
蜥蜴穴を出づ三輪山の登口
風強き沼の白波鮎の声
余震過ぎまだ揺れ止まず雪柳
蜥蜴出づかかと着地の園原過く
男衆の酒を食ふて凧日和
牡丹の芽うすむらさきに童女寝る
擁壁の穴の数だけ蜥蜴出づ
フルートの吹鳴縷々と蜥蜴出づ
蜥蜴出で挨拶の如ふり向けり
春風や移動図書館来る広場
かんびようが頭の中で煮えている
たわひなき夫との諍ひボピー買ふ
地震の禍の荒れた大地に蜥蜴出づ
春炬燵メモから一句に格上げす
うかうかと金寿懶の魚祭
鬪鶏は明日とこうへ鶏眠る
古寺の山門ぐどる牡丹の芽

多 美 子 紀 孝 三 啓 泰 紀 孝 三 啓 泰 弥 采 紀 孝 三 啓 泰 み 悅 羊 み ち 啓 泰 紀 孝 三 そ ら 悅 陽 み ち 多 美 子 そ ら 敦 陽 一

沈丁花香のうしろにて明滅す
菜の花に下総淨土ありにけり
牡丹の芽辯のうしろにキリ、ある
春の雲麒麟の虚壳ありにけり
大輪を貞すとも見えで牡丹の芽
三極や若い女性に行く子犬
ほのぼのと舌蛤となり雀
町の角足停め見あぐ河津桜
蜥蜴出てきより振りむく尻尾瑠璃
白鳥の踏み跡残し本榎村
はるけくも呉天の青さ牡丹の芽
庭園の芝の種時き一人組み
牡丹の芽光陰止まる時もあり
志の高くなり行くふきのたう
牡丹の芽ほぐる前の芽の林
復興の兆しみちのくに少し牡丹の芽
客の居ぬ野外ガーデン雀の子
蜥蜴出づ赤提灯の裏口に
牡丹の芽蕾を包み直立し
牡丹の芽二寸伸びて日の高し
みちのくのすべてを覆う春の雪
高圧電線鉄塔竹の秋
蜥蜴出てまたルリ色の光曳く
行灯の美しき絵桜海老
事無しの海の静かやビニ二デー

三羊 悅子 二陽 悅子
三高 志敦子 三孝 孝三
三敦 子敦子 三榮 荣子
三泰 子泰子 三榮 荣子
三孝 孝三 三榮 荣子
三悅 子悅子 三榮 荣子
三羊 羊三 三榮 荣子
三志 高志 三敦 子敦子
三志 高志 三敦 子敦子
三志 高志 三敦 子敦子
三志 高志 三敦 子敦子

一句鑑賞

増田陽一
啓泰

かんぴょうが頭の中で煮えている

光成高志
啓泰

牡丹の芽うすむらさきに童女寝る

牡丹の芽をよく見ていたら、薄紫の童女が寝ていると感知した作者の感覚に共感します。ほぐれる前の芽は、固く褐色の花弁を被り、やや遅れて縁が薄紫になり、また時期が来ると、薄紅色に変り、それがヨリのようになつて林立する。それがほぐれるのはその後、ほぐれるとともに花弁の形を呈してどんどん大きくなり五月に入ると大輪の花となる。あたかも童女が美しい女君に変化して目覚めるごとく。

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

孝三

「わが庵は三輪の山もと恋しくばとぶらひ来ませ杉たてる門」（古今和歌集）。私の住居は三輪山の麓、恋しいなら、目印の杉の立つている門を探して、訪ねていらっしゃい」という歌を踏まえて、麓の登口にも蜥蜴が出る春になつた。やおら訪ねて行かむ。いやいや、もしかしたら目印の杉はないかも知れぬ。その時は榦の枝を折つて、神に捧げればよいのだ。先の啓泰さんの句を脇において、第三句として転すればこの孝三さんの句になります。光源氏が六条御息所に別れを言いに行く賢木の場面まで及ぶ俳句と見られます。そのように私は鑑賞しました。

干瓢を鍋で煮ながら、火元を離れて他の用事を始めなければならないので、干瓢を煮ていることを忘れないように用心していると、頭の中は煮えている干瓢の意識に充たされる、と言つた具合。干瓢の瓜と人間の頭部とはほぼ同大だから頭と干瓢が入れ替わる、とまで言つていなか。南瓜では俗になるし『干瓢』が絶妙で、意外性と上品なユーモアのある好句だと思います。

莘立や逆さに傘の干されぬて

みち

蕪にもキヤベツにも花茎が出てひたすら上に伸びているところに傘が干されている。「逆さに傘」という把握で唐突に風景を逆転させるような構成に隙がなく、物体だけの組み合わせが良くて、確実な効果をあげている。嘗て上野の都美術館に洋傘を金属で作った彫刻が長く展示されていて、『さ傘』と、諧謔のある題だつたのを思い出した。

蜥蜴穴を出づ三輪山の登口

孝三

古事記、崇神天皇の件にある、活玉依姫に通つ男の行方を搜すと三輪山の神であり、その神は蛇身あつたそうなので、この蜥蜴も怪しげで神話的な氣配があり、何かの化身かもしだれない。

蜥蜴出づ寅さん堤西斜面

蜥蜴出づ赤提灯の裏口に

高志
啓泰

蜥蜴がどこから出でてくるかが大問題で、今週は色々のところから出でてくるので忙しいけれど、それぞれ他はない味があるようです。

蜥蜴出づかかと着地の園児過ぐ

そら

かかと着地で、颯爽と歩くことを教わった園児たちが元気よく、蜥蜴も共に春を喜んでいるようで楽しい。

一句鑑賞（12号分）

飯田孝三

悦子

公魚の釣れたる穴の薄氷

今年は破天荒の寒気と降雪で豪雪地では除雪にえらく難儀。一方、近年は暖冬の影響で各地の湖が凍らず、実施できなかつた湖上で公魚釣りが復活し、一部で湖上名物の賑わいぶりが報じられている。さて、この句、公魚をつたばかりの穴に、おや、もう薄氷。「たる」は、それを目にした時の驚き。臍である。釣れるそばから釣穴に薄氷が張るのだ。その客觀措辞が釣穴の薄氷をまさと目に見せ、湖の寒気がびりびり肌身に迫る。

陽也

二の午や幟は八本入四人

一月二度目の午の日に行われる稻荷社の祭礼。稻荷信

麓から神樂囃子や紀元節

弥栄子

氏神の杜の麓から神樂囃子が響いてくる。今日は紀元節。早春の里山や民家の佇まい、春耕を待つ田畠の情景が目に浮ぶ。昭和ツ子にとっては懐かしい景色だ。昭和も戦前の頃だろうか。かつて日本には、こういう光景が各地で見られたのである。下五はまぎれなく「紀元節」。「建国日」ではありえぬ。

ハガキ句管見（第十三報）

飯田孝三

「開帳百観音の楼めぐる

高志

特定の寺の行事だろうか、それとも「百」は数多の謂か。（僕の田舎の近在、立野百観音（埼玉の元戸塚村、現川口市）を思い出す。昔、学童の遠足の場だった。堂塔が何基か残っている。）ともあれ、「開帳の賑わいが目に浮ぶ。

ハガキ句十三報(・06/4)

入学の背が負けきうなランドセル

妙子
孝三

日暮里の西の駅まで花十丁

高志
リ

幹の瘤ほほと花噴く虚子忌かな

敏子
リ

白鷺を連れて夕日の代搖機

"
春惜しむオカリナの指手話の指

ご開帳百觀音の楼めぐる

"

幼子の後追ふ母の春日傘

"

四月初めの忌日は面白い。一日は三鬼忌、七日は放哉忌、そして八日が虚子忌。同日は仏生会である。孝三さんの桜の幹の瘤に噴く花に虚子を象徴させて余韻が豊かである。辻桃子さんの「虚子の忌の大浴場に泳ぐなり」も諦念があつて面白いです。私はまだこまではいきません。

善男善女にかなう観光のざわめきに、出店の呼び込みの声が混じる。「百」がめでたさを堪え、有難い。「堂」ならぬ、「樓」めぐりが断然の面目。楼からの俯瞰は絵巻を繙

くに似て、蓋し天晴れ。花の雲の隙々に堂塔立ち並び、
講仰の列が引きも切らない。
「楼めぐる絵巻めぐるに似たる春」

白鷺を連れて夕日の代搖機

高志

一幅の日本画を見るようだ。はたまた、ミレーの名画を思い出させる。「連れ」が手柄である。代田作業の一日の時間の流ればかりか、男等が代搖馬を急きたてた昔に遡る、時代の移りを目に見せる。早乙女がうち揃うもない。田植の苦労が減つたのはめでたいのだが、地味、文化が痩せ薄れるのは避け難い。夕映えの白鷺が象徴的だ。地にぽつんと代搖機。青田を連想する田植機ならぬ無地の代搖機が白鷺を浮き立たせる。「白鷺の飛んで代田の日が暮れる」(孝三)

春惜しむオカリナの指手話の指

敏子

オカリナの音はまさしく春。手話での動き又然り。奏者、話者の指の動きに行く春を見るのはさすが。でも、「惜しむ」は口惜しい、言いたくない。主觀の季語の面目は、思わぬ異質感合の妙にかかるのだが。この句を見、初めてそう思った。が、ちよと待て、オカリナの吹奏の对照ではあいか。オカリナに手話を重ねたのも宜なるかな。「春惜しむ」が身にしみる。「行く春の重たき琵琶の抱

きびり)ち」(無村)

幼子の後追ふ母の春日傘

情景がよく見える。だが、「母の」は要らぬのは。

入学の背が負けさうなランドセル

敏子

「入学の背」はできあがり。でも、中七がどうも。せいぜい「入学の背丈かうせるランドセル」か。いつか、確かNHKで、茨木和生がこんな誰かの句をとられた。少し違うかもしれないが、「ランドセルに手と足が生え一年生」

ハガキ句報再見(白金霞八号)

敏子

雨ふふむだけ重くしてねこじやらし

妙子

細い柄に太い穂、ねこじやらしは、只でさえ重たく頭を垂れる。雨を含めば、その分だけなお垂れる。その微妙な気息を捉えたのが、即ち中七「だけ」だ。そこが命だ。なのに、「だけ」が理にかかる(17. 11. 16)とは、節穴も甚だしい。日頃、「微が孕む巨」此に宿る真などと言いいながら、不明を恥じるばかりである。座五に「ねこじやらし」を置き、撓りをありありと見せるあたりも心憎い。

ハガキ句報再見(白金霞12号)

白鳥帰る村の鴉の知らぬ間に

敏子

先日、いとこお武者兄に会った時、この句を話題にしたところ、兄の受け止めは違つた。「白鳥の聖と鴉の俗との対比・対照が面白い」。ぼくなりに敷衍すれば、白鳥さんは優美典雅、神の恩寵ほしまま拍手喝采迎えられ、餌ふんだんにもてなされ

引っかえ俺たち鳥族、俗悪野卑の黒まみれ
冬は餌場もあらばこそ、人里、町へ仕方なく

ひもじさ余り出づれば、光鉄砲空銃からつで

キララドンドン追づばわれ

揚句の果てはひつ捕らえられ、疲労魂憊、村さもどりやあんりや白鳥はもういない、次の舞台で喝采か
一体全体こりや何だ

元を辿れば氣紛れな神の仕業の因果

俺らはどだい知らんこつた、堪忍袋がはちきれそつ

ハ咫様の栄光はどういった

つい、鳥が筆を滑らせました。それにしても、結句、鴉の「知らぬ間に」には恐れ入る。世間の俳句が扁平に見え

る。武者解の方が、作者の気持ちに近いのでは。憐憫と諧謔の色が目に映える。(18. 4. 26)

お便り広場（到着順 敬称略）

白金葭句会では短い間でしたがいろいろお世話になりました。御礼申し上げます。突然の退会故、皆さまにはどうぞよろしくお伝え下さいと申し上げ難いですが、勝手ながら(二)で一区切りつけさせて頂きました。では、失礼いたします。

(H. 24. 2. 23 黒田 彰一)

本日、白金葭第12号(三部)を拝受しました。「芭蕉のかるみ以後(六)」、小澤房子さんも私信で記しているように、益々佳境、親しみ易い達意名文草はわかり易く、筆者の人柄を思わせる。来月は、恐縮ですが、私事で句会を欠席します。何か駄文を寄せられればと思っています。毎度、ご面倒をおかけしますが、早々と立派な仕上がり、お礼申し上げます。就中、追づかけ稿の脱字、誤字には、今更、閉口する外ありませんでしたが、ぴたり正していただきました。感謝々々。

(H. 24. 2. 25 飯田孝二)

「白金葭二月号拝受致しました。見事な文章でひたすら感嘆しております。私が文章を知つたのは、戸田の定

年間近でした。超高層RCの報告書22頁だかを提出した折、半日近くかかり、真赤にされました。第二金曜日は「名画を聴く」の講義の出ています。大正12年生れ、二度の骨折がありながら、今年五年用の日記を購入されました大先生です。孝二先生、光成さん多くの人に恩恵を賜り感謝しています。(H. 24. 2. 28 小山陽也)

高志さん、こんにちは。いつもありがとうございます。とんと俳句しておりませんので、句会に出るのが○しいですが、三月から参加します。よろしく。

(H. 24. 2. 23 しろみそら)

高志、みち様毎日寒いですね。外に出るのが厭です。習字の手本同封します。我孫子付近は地震が多いですね。気をつけてください。(H. 24. 2. 24 杉浦弥栄子)

拝啓「白金葭」に「雷魚」中の小文などいろいろ紹介を頂き有難うございます。なお、「いんき壺あり葵喰の初便り」の拙句、ほめて頂いてありますが、あれは新年会にいらっしゃるといううわさだった青木啓泰さんの挨拶句なので…、「ボルネオの沖へ沖へといんき壺」は啓泰さんの名作として夙に有名ですね。

「軽み」ということでは今は軽っぽい句が世に多いように思います。確かに薄と軽とは違ひあるべしですね。僕は「重くれ」も好きなので、若いときに俳句のケンイとさ

れる指導者はおおかた俳句を読みすぎた老人なので、手の込んだ料理に飽きてお茶漬けを良しとするような美学を初心者に押しつけるのはどうでしようか」などと言つたことがあります。僕としては「軽み」が理想とすれば、それは「絵で言えば、色香の整った絵」ではないか?

ヴァルトル

などと考えます。

羊三さんの「山河の記憶」には多くの共鳴句があり、好きな句集です。有難うございました。いま、版画の刷りに苦戦中で、今年は「国展」のポスターの一枚に使われるで急かされています。頂いたムクロジの実、面白いですね。それではまた。陽一 拝

(H. 24. 3. 1 増田陽一)

三月の声をきき、やつと少し春が感じられるような気持になりました。先日は、きれいな冊子をお送り下さりありがとうございました。白金葭という名は初めて聞きましたが、パンパスグラスのことなのです。母のところへ行つたり来たりしながら「日矢で俳句を続けていますが、なかなか思うようにいきません。どうぞご発展お祈りしています。(24. 3. 2 宮崎晶子)

拝復 お手紙拝見いたしました。お招きありがとうございます。ご期待にそえるかどうか心許ないありさまで

恐縮いたしております。野火との縁うれしく思いました。良子さんはお年をめてしましました。草豊さんも欠詠しておりますが、芳朗さんはまだ健在です。尚、四月九日にお出で下さることですが、どうぞお気づかい無用にお願いいたします。「足労をお掛けするのは申し訳ない」とです。以上用件のみにて失礼いたします。

光成様

24・3・4

菅野

高志さん、んにちは!今日はひさしぶりに自分の時間が持てました。高志俳句のページを読んでいたら

啓蟄やひとひらの皮剥がるるを

そら

というような心境になりました。あらら~ 句会報が電子版になっていますね~。この三月、四月は畑に精出しながらの高志さんのビジョンを推し量りながら頷いているそらです。それではまた。(24. 3. 7 しろみそら)

光成様、会費同封します。古代は別便。今月の出句はズル休みさせて下さい。伯母さんの相続は六日になつて未納の多額の税金があつて一騒ぎの末、八日全て完了しました。みんなに感謝されましたが、疲れました。暫く休んでからボチボチと今迄ののんびりした生活に…。孝三先生と『光成さんにかつて一日一句をと、忘れてはいませんが、生来の怠け者、甚だ申し訳ありません。皆様の益々のご活躍を祈ります。

(24. 3. 12 小山陽也)

光成様「建国記念日の切株で休む」を採評下さいまして誠に有難うございました。因星で、それだけ読みこたえていたべくと日々恐縮です。高志氏のお便り拝読。五月十八日から二十一日まで、稻敷の商工会で台湾に参りますので、又々、申し訳なく思つております。必ず皆さんとそして菅野主宰とも御話を待ちたいものと存じます。

辻井伸行のピアノ聴きをり建国日

高志

結局のところ、この句が最高の手合い本格をもつているものと言つてもよいのではないか。私はそのように考え、「亜」の毎月の選を致しております。ご自愛下さい。
平成二十四年三月十三日 青木啓泰 不一
お昼 新利根商工会支所デスクにて。

受贈誌（3月号）

朝市女冷えし地べたにあぐらかき(薊90号) 森下流子
野火放つ火のなりゆきを知りつくし(萱) 龜田虎童子
春の夜の薄桃色の付箋かな(句と批評 NO4) 菅野孝夫
夜の桜白し詩魂の昂りて(彩103号) 平野ひろし
輪の中に東山あり春の鳶(雷魚87号) 八田木枯
真四角な調整池に鳴来たる(あすか2月号) 山尾かづひろ

緑陰に薄目芋錢の碑の河童(飛行雲62号) 駿河岳水

俳句評論纂

・嘉悦圭二句集「山河の記憶」感銘句十五句 飯田孝二
岳

春立つや鯨の声の贈りもの
妻の忌や鳥帰りゆくみおつくし
遠蛙山の低さのしもつぶさ
朧月天平人も見し伽藍

錦鯉葦簀立てかけ日は裏に
川普請鷗ときをり来てをりぬ
壽の舞

春ける安房や棚田の畦を塗る
更衣鴇天空を存分に
天地の仄と十月櫻かな

はなやかに北山放つ時雨かな
大鷹の羽搏く大氣ひりひりと

逆さ寒蒸かし上りの草園子
春風をゆつくり送る象の耳
青山河稚の生まるるこんにちは
待春

青梅雨や竹人形を商へる

右 感銘句二五句を更に十五句に絞つて掲げました。

大江戸寒窓日記(あすか2月号山尾かづひろ筆)

京橋の仕舞屋にての中間と義母の会話形式でもつて、手習いの中身を述べている本号は面白い。源氏物語の「若菜上」に出てくる「夜深き鶏の声の聞こえたるものあれなり」の行を解説している。私は今源氏物語の精読講座に出てるので興味深く読みました。この巻きに行くのは二三年先です。

芭蕉のかかるみ以後 (七)

光成高志

翁曰、俳諧に古人なし。只後世之人を恐る。去來曰、古人なしとは、古へ達人なきの謂に非ず。然此道古人の姿に依て作しがたし。只日々流行して日に新に、又日々新なり。此故に古人なきとひとし。又來者を恐るゝは、今日各新味さがし求と雖も、後世如何なる人出で、目出度新味を吐出さん。尤來者恥べく恐べしと也。支考が葛の松原に、誤て此を書いて曰、俳諧に古人なしと阿臾は泣給、と云り。我師何ぞ如此の高慢の語有んや。常に宗鑑等宗因に至て深く尊み給事、人々のきく所也。支考が説、此を聞誤か。若筆頭を誤か。然も宗鑑・守武以来、達人世々に乏しからず雖も、此道の神に入事、只蕉翁の

みならん。

去來曰、右、翁の新味を貴み、輕教を示し給ふ。是に於て考へ玉べ。(去來不玉宛論書)

この条は、去來が師翁の「俳諧に古人なし」という語が世間に誤解される事を恐れたのと、この語が、師翁の新風開拓の意見を一言の中に述べたものである事を告げんがために特に不玉に書き贈つたものである。この語が誤解されやすいのは、芭蕉が古人の俳人を蔑称して、俳諧に師と仰ぐべき古人は無いのだと言つた如くにも、取られ易いが故である。それを去來は、芭蕉翁は宗鑑守武以来の俳人を決して軽蔑しているのではない。師翁はそのようないい高慢を言う人ではない。師をしてかかる言を吐かしめたのは、俳諧は日に新たに日々に新たに新しさに向つて進むべきもので、いささかも一風に定停すべからざるものであることを、門人に示さんがためである。従つて、師翁の風に於いてすらも、過去の風に従うことを喜ばずして、新風に向う者を喜び、共々に新味開拓に努力されたのである。従つて、古人の作は、それを規範としてこれに倣うことの出来ない。これは自明な事柄である。「古人なし」とは、「ただ新しく、昨日の我に飽いて、今日の新しい味を追求するのが俳諧の道である」と言われたのと同一の意である。言葉をかえて言えば、自己の旧風を洗

い旧染を雪ぐことである。新しさを求めるとは、旧染を洗い、これから脱却することである。その旧染を洗う事とは、往事の重い句風を踏み破る」とであつて、重味を踏み破らんがためには、軽味に移る事を措いて出来がたのである。だから、師翁の新味を賞し、軽き教えを示し給ふ意を了解せられよ、と述べているのである。この出来の語は、「俳諧に古人なし」という語を、芭蕉の真意に立入つて解明したものである。現在の我々の作句の心構えや更には実人生をわたる心ばくにもよく染みとおる言葉である。「俳諧に古人なし只後世の人を恐る」これが芭蕉の簡潔にして、軽みを説く別な言い方であった。

我孫子日記

2／17例会。2／24保健セミナー。2／29SOA。3／2八重洲。3／4銀座。3／7SOA。3／9湯島*。3／12我孫子。3／13青山六本木**。3／14SOA。3／15銀行。3／16例会。

*湯島天神吟行句会(宣)

春泥を飛び越す巫女の傘さして

梅祭り終はりし後の屋台かな

夫婦坂上れば雨の梅匂ふ

四方より坂あつまつて梅の花

嘉男 高志 敦子

万太郎も棲みし梅の男坂
花馬酔木鏡花の塚に寄りそつて
いの艸月造形科作品展

ビル群の六本木なりクロツカス
舊乃木邸棗芽吹きて鳩飛べり
行灯の美しき絵桜海老

榮昌の花魁行灯雛納め

乃木夫妻殉死百年春の鷗

行燈の美しき絵桜海老

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴じ製本型で編集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

五月の兼題を練供養から祭に変更したので、祭の取材をせんと浅草に出かけた。三社祭は五月と心得ていたのだが、今年は三月にあるというので、十八日に出かけたのであった。行つてよかつた。三社祭は、正和元年(一一二)に、三社の神話に基づき行われた舟祭がその起源といわれており、今年、平成24年(一〇一二)は、700年祭

一艸人
敬司

みち
敦子

みち
敦子

みち
敦子

みち
敦子

みち
敦子

となるとか。これを慶賀して、本来の舟祭を二年の準備を掛けて、本来の三月に挙行したのであつた。舟渡御のそ

の前は昭和33年（一九五八）であるとか、実に54年ぶりに再現したことであつた。三社は観音像を網ですくつた、檜前浜成（ひのくまのはまなり）・竹成（たけなり）兄弟

と、それを鑑定した土師中知（はじのなかとも）である。初め槐の切株に安置して拝んでいたのを、土師中知に見てもらつたところ、「これぞ、聖觀音菩薩の尊像であること」を兄弟に告げたそうです。そこで近くの百姓達は黎のお堂を建ててその像を祭り、びんざくら舞を踊つて祝つたとされている。これは、推古天皇36年（六一八）の古い出来事であった。ここに、兼題にした、黎が出てきたのにも不思議な縁を思った。黎は飛鳥時代に既にあつた植物であつたのだ。

特別作品

作者註

一句目 南国に死して御恩のみなみかぜ（摂津幸彦の句あり）。

二句目 さとうきび畑（森山良子）の歌から。

三句目 沖縄戦で多くの女性がこの岬から入水した。

喜屋武岬
きやん

増田陽一

琉球孤島づつのみなみかぜ

砂糖黍葉擦れの声は人のこゑ

夏蝶に骨なかりけり喜屋武岬

青羊歯やここに死したる少女隊

ひめゆりの孫に道聞く夏の果

戦禍語らざれ洞閉ざす榕樹の根

幼靈の拋る御嶽なり樹雨して

半島を勁く曲げたる御嶽夏

ただ搾る酸性柑の沁みる夏
シーサー

首里城の朱は痛しや旱雲
あけ



三社祭舟渡御(H. 24. 3. 18)

誓子俳句翻訳（1）The Essence of Modern Haiku 300 Poems by Seishi

Yamaguchi(1993)より転載

落花とぶ 時の外には 生きられず

Blossoms in the air
unable to stay longer
and still escape time.

Composed 1955.

Cherry blossoms are flying through the air. Their movement is controlled by time. This is true not only of plants, but of human beings too. We cannot escape the world of time.

白金葭 第13号 平成二十四年三月発行 表紙の題字:嘉悦羊三。写真は白金葭

編集・発行人 光成高志(FAX 04-7187-1068)

発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17